

第2章

ワーキンググループによる研究



授業づくりワーキンググループ

1 研究の目的

平成31年度の研究で定義した「生涯学習力」を各学部で具体化し、授業づくりに生かす。

2 研究の内容

(1) 生涯学習力の具体化と検証

①生涯学習力の具体化

平成31年度の研究で「生涯学習力」は、「主体的にヒト・モノ・コトに関わり、生涯にわたって学びに向かい成長しようとする姿」と定義されている。「生涯学習力」を高める授業づくりをするために、まずは「生涯学習力」を改めて共通理解する必要があった。そこで、小学部は「エンジョイタイム」、中学部は「作業学習」、高等部は「Dスタディ」の授業を取り上げ、それらの授業で「児童生徒に育みたい力」や「生涯学習力が高まった姿」について検討を行い、「生涯学習力」を具体化してキーワードにした(図1)。

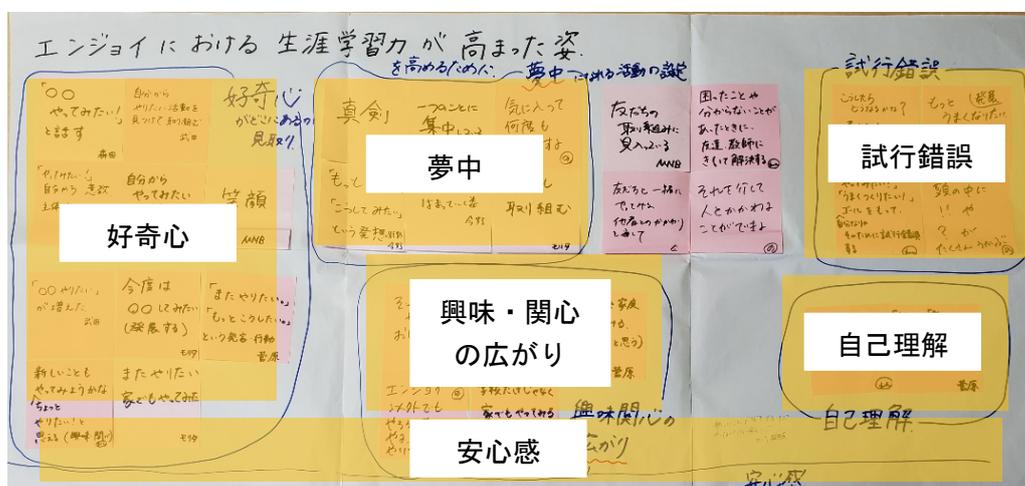
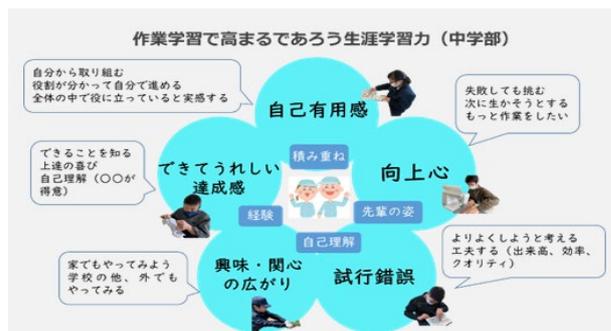
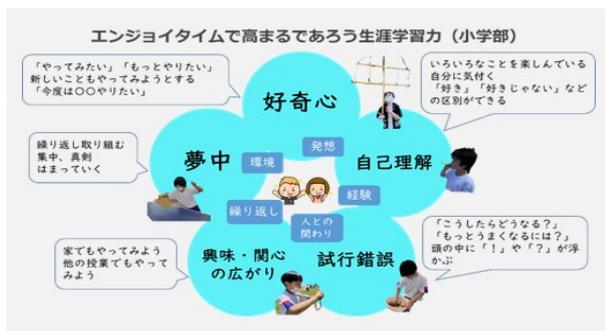


図1 生涯学習力の具体化



「生涯学習力」を具体化したこれらのキーワード(図2)が、児童生徒の実態や児童生徒の教育的ニーズと比較して適切かどうかを、学部ごとの授業研究会やエピソード記録を活用した学部カンファレンスで検証した。

図2 「生涯学習力」を具体化したキーワード

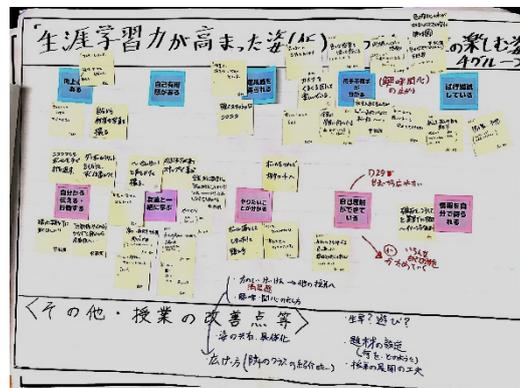


②具体化したキーワードの検証

ア検証その1 授業研究会

「生涯学習力を具体化したキーワード」を基に、各学部で授業を行い、授業の中で児童生徒の学習に取り組む姿から、「生涯学習力」を具体化したキーワードがふさわしいものなのか、キーワードに当てはまるか、また、新たな視点はないかなどの意見を出し合った。

小学部の授業研究会では、エンジョイタイムを通して育んでいる力が生涯学習力の素地となっているかを確認するために、児童が楽しんでいる姿が、中学部・高等部の「生涯学習力を具体化したキーワード」とどのようにつながっているのか意見を出し合った。例えば、カメラで自分から何度も写真を撮る姿は「向上心」につながっている、教師に「磁石をこうしてください」と伝える姿は「情報を自分で得ること・伝えること」につながっているなど、どのグループでも、児童の楽しむ姿を、中学部・高等部が考える「生涯学習力」に分類できており、つながっていると確認できた。



中学部の授業研究会では、作業学習で身に付いた力や生徒の取り組む姿が、「生涯学習力を具体化したキーワード」(図3)に当てはまるのかを協議し、キーワードの見直しを図った。例えば、自分のやる事が分かって活動している姿は、「生涯学習力」を具体化したキーワードの「自己有用感」、丁寧に作ろうとしている姿は「試行錯誤」に当てはまるという意見や、「切ってよい枝や収穫できるトマトを見極めていた」という生徒の姿から、「自己判断」という視点もあるのではないかという意見が挙げられた。



図3 「生涯学習力を具体化したキーワード」

高等部の授業研究会では、本学准教授、谷村佳則先生をお招きし、次の助言をいただいた。

- 動画編集における自分の強みや得意なことを生かしながら友達や教師、地域の方など、様々な人（他者）の気持ちを受け入れて動画を改善するという事は、自分の考えや気持ちを調整する「自己調整」する力が求められていた。
- 様々な人（他者）とのやり取りの中で、自分の強みや得意なことを相手や状況に合わせてどのように使うかを考える、自己理解を深めるきっかけになっていた。
- 学びの成果を「般化」し、他の学習やふだんの生活の中で生かすことが大切である。学びの成果の積み重ねが問題解決に向けて進んでいく生徒の原動力となる。

イ検証その2 エピソード記録を活用した学部カンファレンス

STEP 3 授業研究会から

- ▶ 他者の気持ちを受け入れ、自分の気持ちや考えを「自己調整」する力
- ▶ 他者との関係の中で「自己理解」を深めるきっかけになっていた
- ▶ 学びの成果を「般化」し、他の学習や生活の中で生かすことが大切

検証の2つ目として、各学部の抽出児童生徒のエピソード記録を基に、学部カンファレンスを行った(図4)。

初めに、抽出児童生徒の行動の背景、教師の思い、授業場面における抽出児童生徒の象徴的な出来事をエピソード1として記録した。

それを基に「育みたい生涯学習力」「必要な支援」「授業づくりのポイント」の視点で学部カンファレンスを行い、改善授業をして、その後のエピソードや考察をまとめた。

このエピソード記録を活用した学部カンファレンスを通して、児童生徒の変容を見取り、高まった「生涯学習力」について意見を出し合い、キーワードの見直しを図った(図5)。

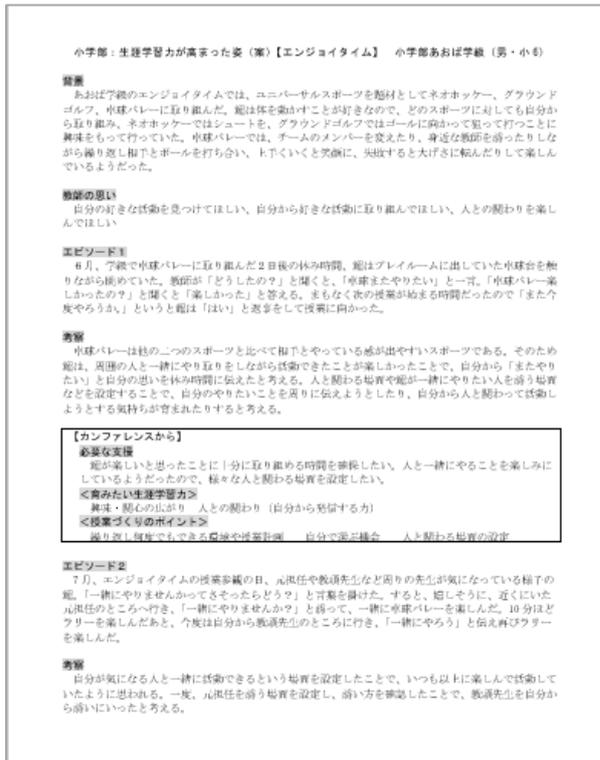


図4 エピソード記録

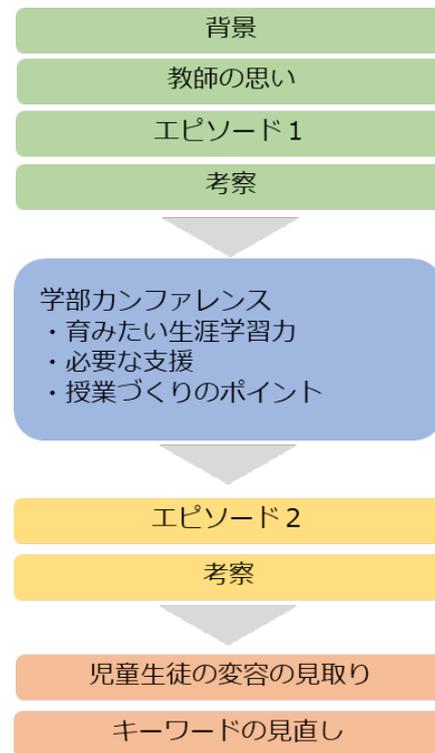


図5 キーワード見直しの流れ

授業研究会や学部カンファレンスを通して検証していく中で、「生涯学習力」を具体化したキーワードは、「生涯学習力」を高めるための授業づくりをする上で、教師が大切にしている要素でもあるという意見が多く出た。

これらの検証結果から、「生涯学習力を具体化したキーワード」としていたものを、「生涯学習力につながる、授業づくりで大切にしていること」として、次のようにまとめた。

③「生涯学習力」につながる、各学部の授業で大切にしていること

ア小学部の「エンジョイタイム」で大切にしていること(図6)

小学部では、興味・関心を広げたり、様々な経験を積み重ねたりすることが、「生涯学習力」の素地になると考えている。

この素地を育むために「エンジョイタイム」で大切にしていることは、「おもしろそう! やってみたい!」「今度はこんなことをしたい」という「好奇心」。繰り返し取り組んだり、集中して活動に向かったりする「夢中」。「もっとうまくするにはどうしたらいいかな」などと考えながら取り組もうとする「試行錯誤」。友達を楽しんでいるのを見たり、他者からの関わりを受け入れたりしながらやってみようとする「人との関わり」。「ぼくはこれが好きだ!」「これは少し苦手」などと自分を知る「自己理解」の5つであるとまとめられた。

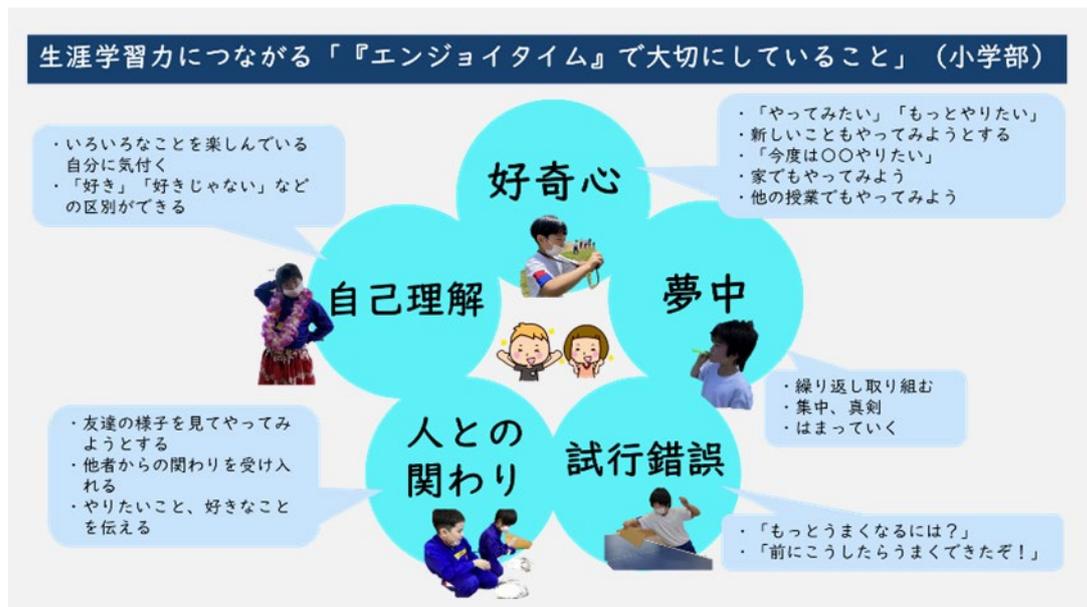


図6 小学部の「エンジョイタイム」で大切にしていること

イ中学部の「作業学習」で大切にしていること（図7）

本校中学部には3つの作業班があり、様々な作業を経験して興味・関心の幅を広げることが「生涯学習力」につながると考え、「興味・関心の広がり」を要素の一つとして挙げている。また、「自己選択・自己決定」は、自分の考えをもち、〇〇の作業をしよう、〇〇がやりたいなど自分で判断して作業する姿、「試行錯誤」は、製品をよりよくしようと考えたり、工夫したりすることを通して、効率や製品のクオリティ、出来高などを考えて作業すること、「自己理解」は、自分の得意な作業、苦手な作業や集団の中での自分の役割が分かること、「やり遂げる力」は、作業で失敗をしたり、うまくいかないことがあっても次に挑戦したり、生かしていこうとする姿として、5つの要素を挙げた。

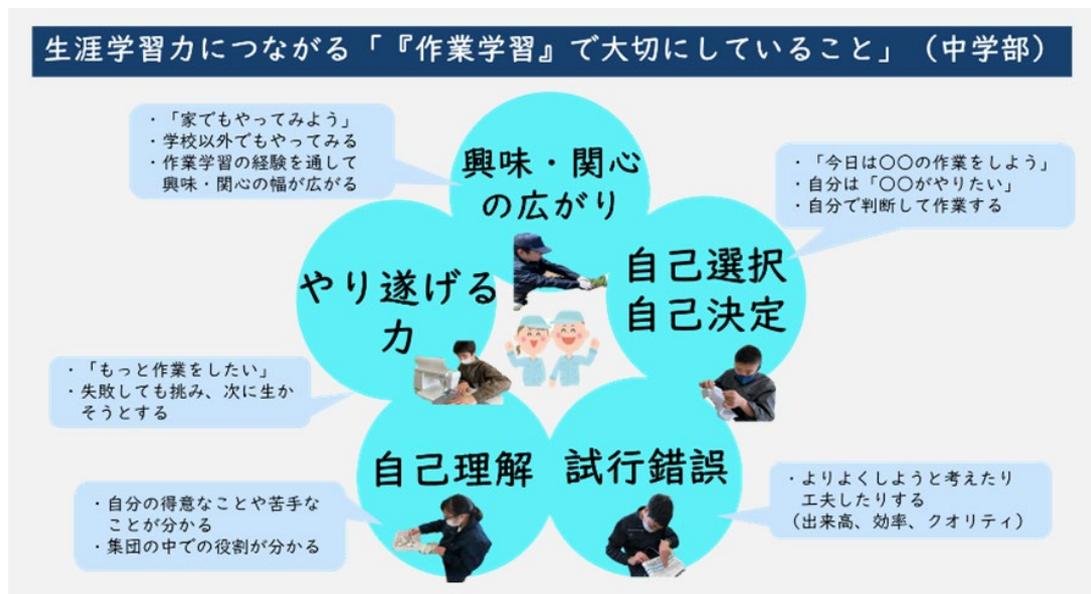


図7 中学部の「作業学習」で大切にしていること

ウ高等部の「Dスタディ」で大切にしていること（図8）

高等部では、自分の強みや得意なこと、得意な学び方を知る「自己理解」。様々なこと・場所で、自分から「やってみよう！」とする気持ちを高める「実行力」。自分で考え、選んだり、決めたりして行動する「自己選択・自己決定」。情報の収集、分析、整理、活用ができることや、相手に伝わるように伝えることができる「情報活用力」。そして、友達や様々な人との関わりや余暇の広がりにつながる経験の「社会性」と設定した。

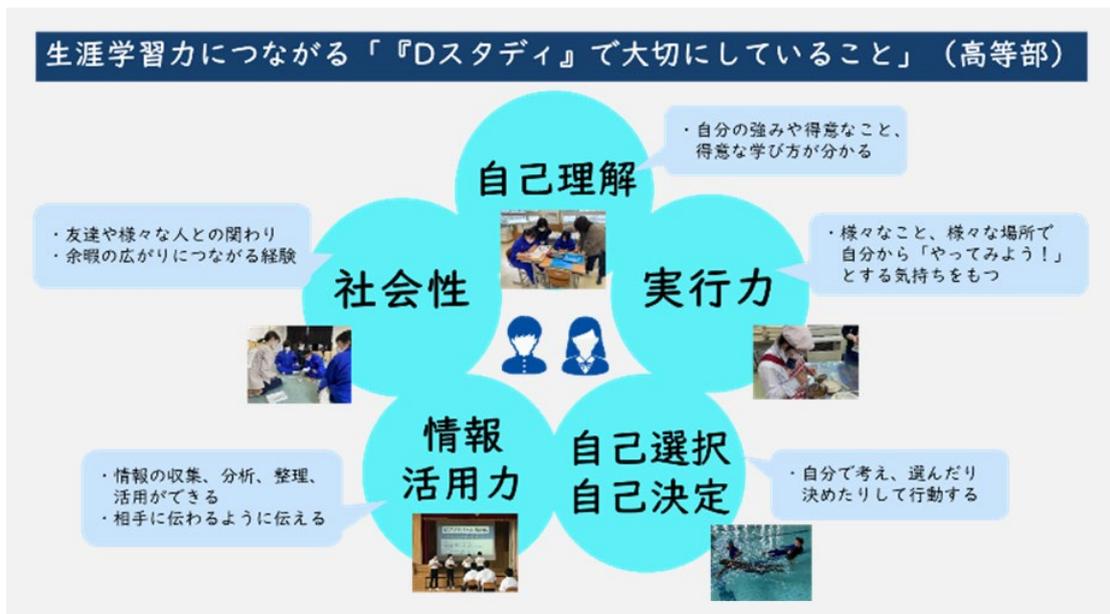


図8 高等部の「Dスタディ」で大切にしていること

(2) 学部間のつながりの検証

学部ごとにまとめた、それぞれの授業で「大切にしていること」を照らし合わせると、「自己理解」がどの学部にも共通して見られた(図9)。

具体的な姿に着目すると、小学部では「自分」、中学部では「集団の中での自分」、高等部では「自分を客観的に捉え、自分の力を社会の中で発揮する」というように、「自己理解」というキーワードでも言葉の捉えが発達の段階によって異なることが分かった(図10)。



図9 各学部の「自己理解」

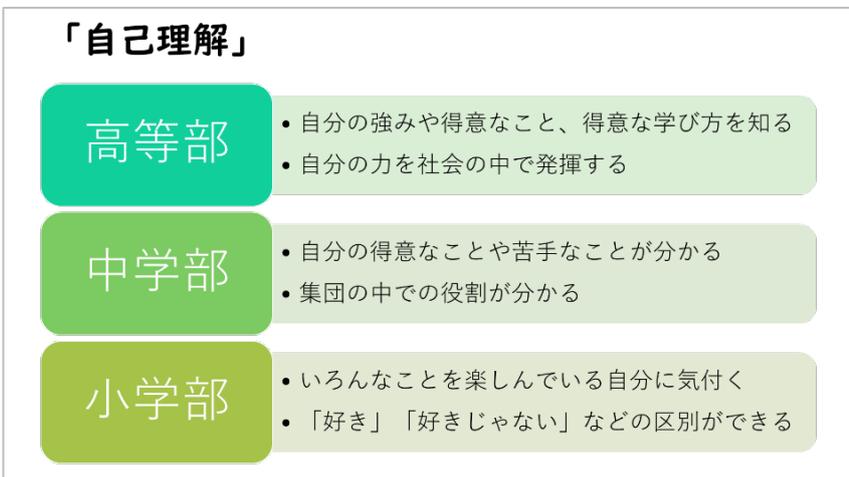


図10 各学部の「自己理解」の捉え

また、小学部の「真剣に集中して取り組む姿」の「夢中」が、中学部の「失敗しても最後まで取り組もうとする姿」の「やり遂げる力」につながっていたり、小学部の「他者からの関わりを受け入れる姿」の「人との関わり」が、高等部の「友達や様々な人と関わる姿」の「社会性」につながっていたりと、同じような要素を大切にしていることが分かり、学部が違っても「生涯学習力」の具体的な姿を同じように捉えられていると確認できた(図11)。

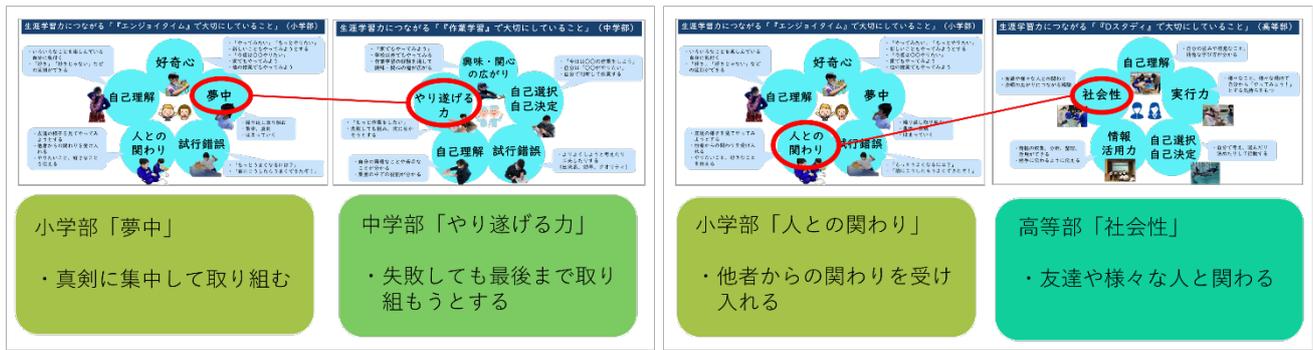


図 11 学部の「大切にしていること」のつながり

3 今後に向けて

今後の展望としては、今年度各学部で作成した、「生涯学習力につながる、大切にしていること」を活用した授業づくりを考えている。

各学部で大切にしている5つの要素を指導案に盛り込み、授業の評価や変容を見取る視点として活用していく(図12)。児童の変容を見取る際には、今年度同様エピソード記録も活用していきたいと考えている。

また、今年度は各学部一つの学習場面を取り上げて「生涯学習力につながる、大切にしていること」を検証したが、他の学習場面でも活用し、汎用していきたいと考えている(図13)。

(2) 単元設定理由 資料2 ㉑:自己理解 ㉒:自己選択・自己決定 ㉓:実行力 ㉔:情報活用力 ㉕:社会性

本単元では、これまで関わりをもったことがある店舗のCM制作をテーマに、自分たちで学習の計画を立て、実践する中で、相手の気持ちを考えたり、相手に伝わるポイントを学んだりする。年間を通して、「相手に伝わる伝え方」をテーマに学習に取り組んでいる。これまでは、特定の相手への自己紹介、友達や教育実習生への本の紹介などを題材に学習してきた。単元を通して、①コンセプトを決める→②計画を立てる→③実践する→④意見をもらう→⑤改善をする→⑥再度実践をするという展開を繰り返してきた。また、紹介の際には、1人1人が自分の思いを表現できるように各々の紹介を行う形態を取ってきた㉑。学習の際には、言語で伝えるだけではなく、生徒各自のタブレット端末のアプリケーションソフト「Keynote」を用いて、視覚的にも相手に伝わる伝え方を考え、学習してきた㉒。

今年度始めの学びたいことアンケートでは、「動画編集」「校外での学習」などが挙げられた㉓。そこで、本単元では、自分たちで動画編集のコンセプト決めたり、友達と一緒に動画を制作したりと協働する場面を多く設定する㉔。これら学習をに筋道を立てながら計画的に物事を進める経験や他者の意見を受け入れながら㉕。また、店舗のCM制作は、自分の考えを分かりやすく伝えるだけでは取り改善に生かすことで、今まで以上に相手の気持ちを考える機会が設定での学習に取り組むことで、生徒の地域への興味・関心や関わりを広げたり結び付いたりする㉕一助となり、生涯学習力が高まるを考える。

以上のことから、本単元を設定した。

図 12 「大切にしていること」を盛り込んだ指導案の例

(2) 生徒のねらいと手立て

No	氏名・性別	個別のねらい	手立て
1	I・S (男)	30秒の時間の配分について自分の考えを伝える。㉑	ワークシートに動画の構成を記入できる欄を設ける。
2	S・R (男)	要望動画から相手の気持ちを予想し、動画で用いる文字を決める。㉒	文字の必要な部分を絞れるように、動画に入っていたテロップをキーワードで表すように言葉を書ける。
3	T・Yu (男)	落ち着いた雰囲気合う曲や色について、自分の考えを伝える。㉓	落ち着いた雰囲気の曲について、テンポや音の高低について質問をする。
4	T・Yo (男)	動画に入れる文字の出し方や色について自分の考えを伝える。㉔	文字の効果や色について複数の選択肢を提示する。

㉑:自己理解 ㉒:自己選択・自己決定 ㉓:実行力 ㉔:情報活用力 ㉕:社会性 資料2

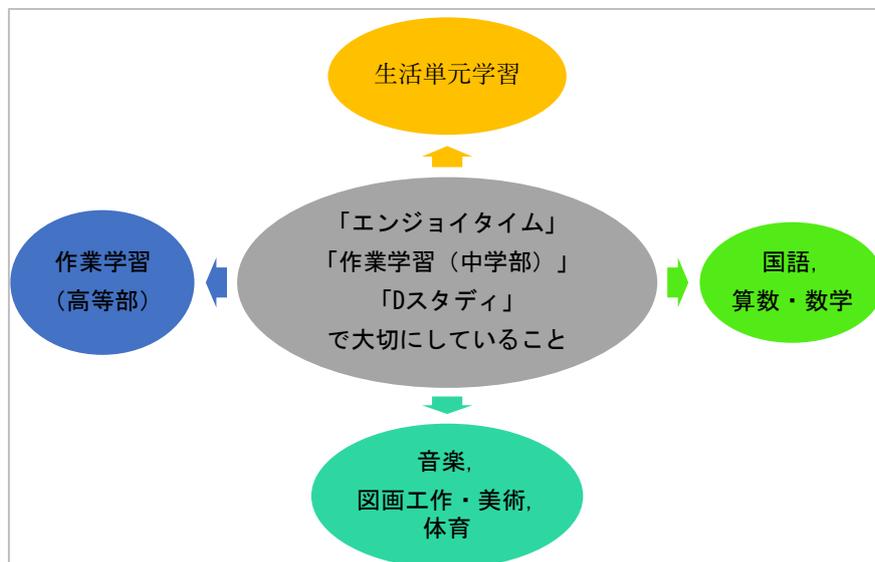


図 13 他の学習場面への汎用

オリジナルマップ活用推進ワーキンググループ

1 研究の目的

昨年度の研究において作成・活用を提案した本校のオリジナルマップの活用を切り口とし、生涯学習力を高める授業づくりを進めるために効果的なツールを作成し、活用するための仕組みをつくることを目的として研究を進めた。

2 研究の内容

(1) 本校のオリジナルマップとは

本校で作成しているオリジナルマップとは、グーグルマップの「グーグルマイマップ」という機能を用いて作っているマップ（図1）で、学習で利用した施設や行ってみたい施設などをメモや写真と共に記録している（図2）。マップをツールとして活用することのメリットとしては次の点が挙げられる。

- ・情報が視覚的に分かりやすい。
- ・学校や自宅、それぞれの施設との地理的な関係が分かりやすい。
- ・写真、メモ、などの様々な情報を必要に応じて足すことができる。
- ・施設のwebサイトにすぐに接続できる。

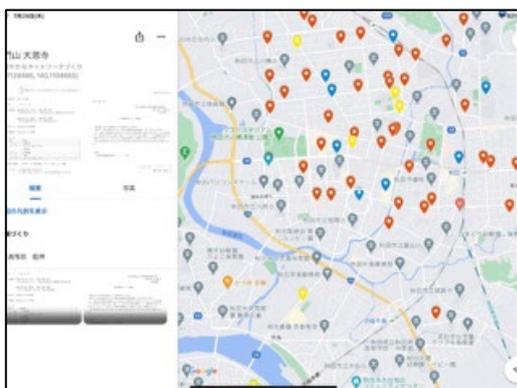


図1 オリジナルマップ

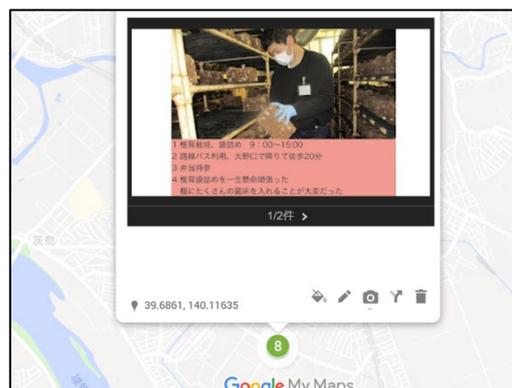


図2 学習の記録

(2) オリジナルマップ活用に向けた取り組み

オリジナルマップ活用に向けた取組として、次の3点から研究を進めた。

①オリジナルマップと教育課程との関連の整理

オリジナルマップを活用した学習は、マップそのものの完成がゴールではなく、オリジナルマップを活用した学習を通して、自分が頼るヒト・モノ・コト、自分を充実させるヒト・モノ・コトなどの、地域の活用できるヒト・モノ・コトに気付いたり、分かったりすることが大切であると考えた。

さらに、このオリジナルマップを活用した学習を推進することで、自ら学習を進めようとする意欲や、「生涯学習力」を高めようとする動機付けにつながり、教育課程全体では、マップやマップの学習で分かったヒト・モノ・コトと関わるための知識・技能の習

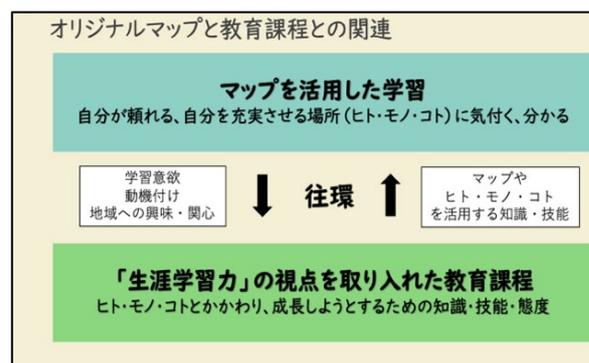


図3 オリジナルマップと教育課程との関連

得につながるという往還となると考えた。(図3)

②夏のセミナー

本校が開催した夏のセミナーでは、マップを活用した本校での実践について紹介し、次の点について示唆を得た(図4・5)。

- ・夢や思いの実現に向けて子どもたちの世界を広げることが大切であること。
- ・生徒それぞれのマップを共有することで効果が高まるのではないかと。
- ・実体験と抽象概念をつなげていく上でICT機器が効果的であること。
- ・卒業後も使えるツールになることが望まれること。

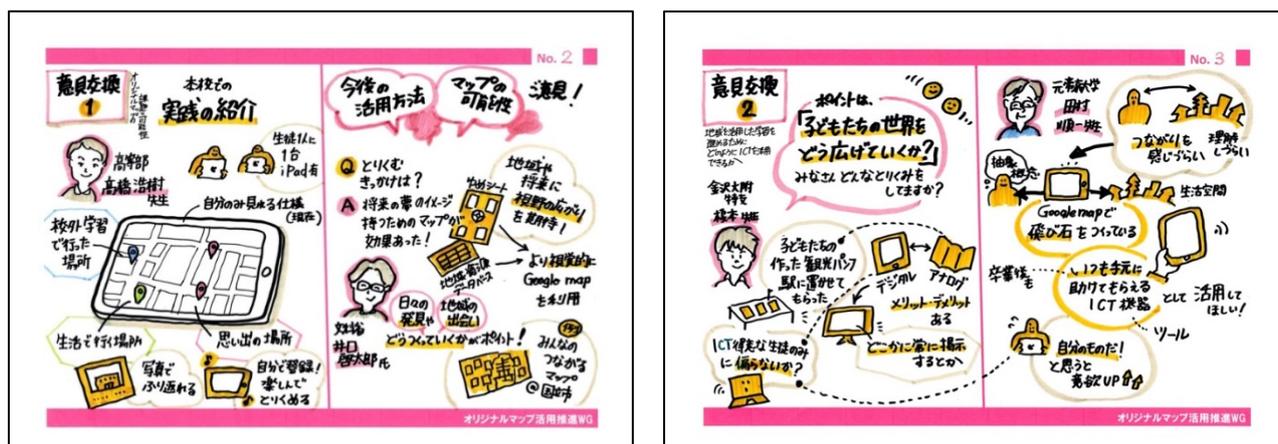


図4・5 夏のセミナー 意見交換より

③環境の整備

オリジナルマップの効果的な活用に向けて、次の環境整備を進めた。なお、環境整備に当たっては、パナソニック教材財団の助成を受けて行った。

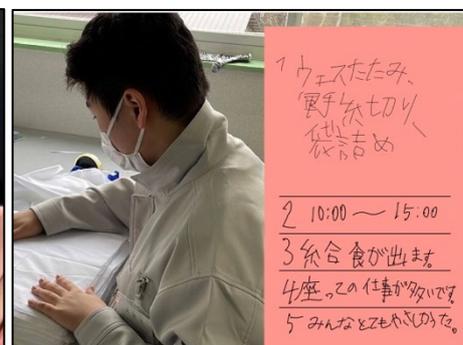
- ・共有による学びの深まりという視点から、校内に生徒それぞれのマップを共有するためにモニターを設置。
- ・様々な実態に対応し、写真などに直感的に情報を書き込んでマップに反映できるように、Apple Pencilを導入。
- ・情報機器の活用の仕方やマップを授業づくりに生かすための、職員研修の実施。



写真1 モニター活用の様子



写真2 Apple Pencil 活用の様子と実際に記入したもの



(3) オリジナルマップ活用の実践

オリジナルマップを活用した実践を進めるに当たって、「生涯学習の高まり」をゴールとした小学部から高等部までの一貫した活用を目指し、段階的に活用することとした。そこでワーキンググループのメンバーで、各学部において必要とされる力や目指すところについて付箋紙を用いて整理を行

い、学部間での一貫性を図のように想定した。今年度は各学部の特定の学習集団において活用を進め、段階的なオリジナルマップの活用について検討した（図6）。

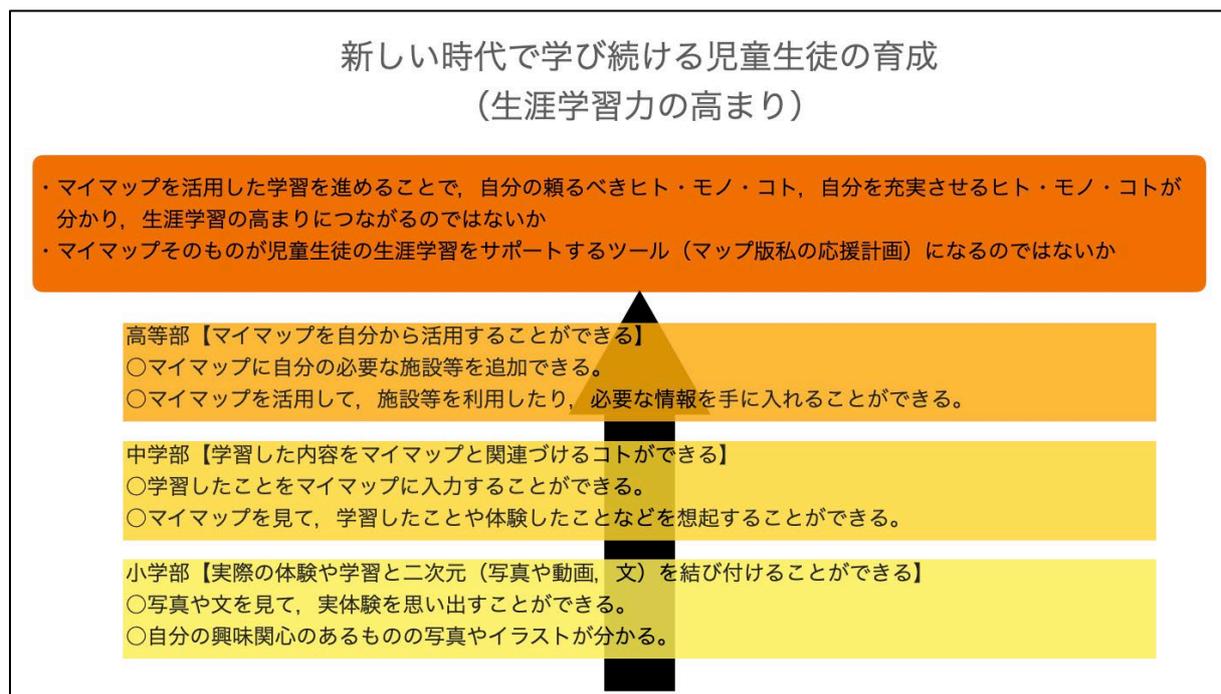


図6 オリジナルマップの段階的活用に向けて

①小学部の実践

アオリジナルマップ活用に向けての方針

小学部においては、オリジナルマップを活用することに向けて、マップを含めたICT機器に慣れること、実体験と文字や写真といった抽象概念とを結び付ける経験が大切であると考えた。

イ具体的実践

小学部の教育活動について、ワーキンググループ内の小学部職員で次の2点を整理し、オリジナルマップ活用に向けて小学部段階で大切となることをまとめた。

- ・実体験と文字や写真等の概念といった抽象概念とを結び付けることにつながる教育活動
- ・小学部の教育活動において現在ICT機器を活用している場面

ウオリジナルマップの活用に向けた課題

小学部の教育活動について整理したものが表1・2である。

表1 今年度の小学部における実体験と抽象概念とを結び付けることにつながる教育活動（抜粋）

単元・題材	指導の形態	学習グループ	具体的な活動内容	頻度等
おもいでをかこう	生活単元学習	あおば・わかば	写真と文字による作文指導	月2～4回程度
アルバムをつくろう	生活単元学習	わかば	写真アルバムの作成	月1回
エンジョイタイム	生活単元学習	全学級	写真とコメント記入での学習の振り返り	年3回
なかよしレクリエーション	生活単元学習	全学級	写真を使った事前学習	年1回
なかよしレクリエーション	生活単元学習	全学級	写真とコメント記入での学習の振り返り	年1回
わかばと祭	生活単元学習	全学級	写真や動画を使った事前・事後学習	年1回
ステップアップあおば	生活単元学習	あおば	イラストと写真を用いた好きなものシートの作成	年3回
チャレンジあおば	生活単元学習	あおば	地図アプリによる買い物の事前学習	年6回

表2 今年度の小学部におけるICT機器を活用している場面（抜粋）

具体的な活用場面	指導の形態	主な使用者
写真や動画の提示	各教科、生活単元学習	教師
漢字・計算等の学習アプリの使用	国語、算数	児童・教師
学習の記録としての動画撮影、振り返りとしての動画の再生	各教科、生活単元学習	教師
風景や作品などの写真撮影	図工	教師・児童
授業の流れの提示や板書としての活用	音楽	教師
ダンスの仕方や体の動かし方といった手本など提示	体育	教師
YouTubeの使用	休み時間	児童
リモート授業での活用	各教科等	教師

教育活動の整理を通して、次のことが確認できた。

【実体験と抽象概念との結び付き】

- ・主として生活単元学習を中心に行っている。
- ・写真にコメントを貼るなどの具体的な活動が多い。
- ・年間を通じて、行事や単元の節目などに多く行っている。

【ICTを活用している場面】

- ・特定の学習集団や教科に限らず、全学級において様々な教科や各教科等を合わせた指導で活用されている。
- ・主として教師が操作して活用している場面が多い。

これらの実態から、小学部において、オリジナルマップの活用に向けて必要な取り組みは次の点であると考えた。

- ・実体験と抽象概念とを結び付けることにつながる教育活動の継続
- ・児童自身が主体となってICT機器を操作する場面の設定

② 中学部の実践

ア オリジナルマップ活用に向けての方針

中学部段階では、オリジナルマップの使い方や活用の方法を体験的に理解するために、自分の興味や関心に基づいて学習の中でオリジナルマップを活用することが大切であると考えた。

イ 具体的実践

- ・中学部3年生の生活単元学習「きらきら探検隊 修学旅行にレッズゴー」の中でオリジナルマップを活用した。この単元は、修学旅行に向けての調べ学習を中心とした単元である。修学旅行の行き先や行程について調べて、修学旅行の結団式の際にオリジナルマップで行程と活動内容について中学部1・2年生に発表をした（図7・写真3）。
- ・「私の応援計画」への活用として、「はたらく」「くらす」「たのしむ」の観点から、今活用している施設、将来活用したいと考えている施設を選び、「ゆめシート」に記入した。3年生が作った「ゆめシート」を中学部1・2年生にオリジナルマップで伝える機会を設定した。

ウ 成果と課題

これらの実践を通して生徒に次のような姿が見られ、中学部段階において興味・関心に即してオリジナルマップを活用することが身近な地域に興味をもつことやそれらの理解を深めることなどに有効である



図7 オリジナルマップを活用したしおり



写真3 オリジナルマップを活用した発表

ことが示唆された。

- ・校外学習や修学旅行の事前学習で、目的地を入力することで、場所、実際の写真、ルートをイメージすることができた。
 - ・オリジナルマップを活用した発表では、中学部1・2年生が視覚的に分かりやすく、イメージを広げることにつながった。
- 一方で、オリジナルマップを定期的に活用する場面がないと、生徒が自身から活用することにつながらないという課題も見られた。

③高等部の実践

アオリジナルマップ活用に向けての方針

高等部では、オリジナルマップの実践的な活用に向けて、オリジナルマップを実生活と結び付けて活用することが大切であると考えた。

イ具体的実践

高等部1年生の生活単元学習「現場実習を紹介しよう」の中でオリジナルマップを活用した。この単元では、中学部3年生に自分達の現場実習の様子を伝えることを目的として、現場実習の振り返りやその発表を行った。オリジナルマップの具体的な活用場面は次のとおりである。

- ・自分の現場実習の様子を写真や文字とともにオリジナルマップに記録する。
- ・自分の作ったオリジナルマップを使って、中学部3年生に実習の様子を発表する（写真4）。



写真4 発表の様子

ウ 成果と課題

この実践を進める中で次のような生徒の姿が見られた。

- ・オリジナルマップに実習先を掲載するとき、実習先の作業内容や勤務時間だけでなく、自宅からの行き方も含めた情報を記入することができた。
- ・実習で印象に残ったこと、行ってよかったこと、難しかったことを自分の言葉で中学部生に伝えたことで改めて自分たちの実習を振り返ることができた。
- ・学校でのオリジナルマップの学習を生かして、新しく通う美容室を登録、実際に利用するなど家庭生活においてオリジナルマップを活用した。

一方で、オリジナルマップを授業で意図的に活用する機会をつくっているが、生徒たちが「いつ」「どのように」追加していくかを検討し、持続可能な活用ができるシステムを構築することが課題として挙げられた。

3 今後に向けて

今年度の研究から、オリジナルマップを活用した学習を進めることで、身近な地域資源についての興味・関心が高まること、地域資源についての理解を深める上でオリジナルマップを活用した学習が有効であることが示唆された。このことから、生涯学習力を高めていく上でオリジナルマップが有効なツールとなると考える。また、オリジナルマップを活用した学習を進めていくことで次の3点についての効果が期待される。

(1) ICT活用能力の向上

これからの変化の激しい時代において自分から学び続けるためには、ICT活用能力は必要不可欠な力である。オリジナルマップを活用した学習では、オリジナルマップを作成、利用する過程で、機

器を操作する力や必要な情報を取捨選択する力といったICT活用能力が体験的に育まれていくと考えられる。

(2) 学習の履歴を積み重ねていくポートフォリオ

学習の記録や活動の写真をオリジナルマップ上に蓄積していくことで、個人の学びの深まりや広がりが見えるポートフォリオとなることが期待される。オリジナルマップは個人のマップであるため、学部に関係なく一つのマップにこれまでの学習の履歴が蓄積されていく。そのため、児童生徒自身だけではなく、教師間で活用することで、これまでの学習の履歴を共有する引き継ぎ資料としても活用することが可能となる。

(3) 卒業後も自分で使えるツール

本校では、本人が主体となって作成する個別の教育支援計画「私の応援計画」を作成している。この「私の応援計画」の内容とオリジナルマップとを関連させることで、卒業後に自分が頼る場所などを利用する助けとなり、本校卒業後の生涯学習を支えるツール「私の応援マップ」になると考える。

今年度は、特定の学習集団においてオリジナルマップの活用を進めたため、長期を見越した計画的な活用や各学部間のつながりといった課題が見えてきた。より効果的にオリジナルマップを運用していくためにはオリジナルマップを活用した実践を積み重ねていく必要がある。そこで中学部で作成した「中学部オリジナルマップマニュアル（試案）」（図8～10）を今後のオリジナルマップ活用の基礎とし生涯学習の高まりに向けた実践を全校体制で進めていきたい。



図8 マニュアル表紙



図9 オリジナルマップの作り方



図10 中学部の実践

地域とつながるワーキンググループ

1 研究の目的

「生涯学習力」を高めるため、学校と地域との間で「ゆるやかなネットワーク」を構築し、どのように地域に働き掛けていけばよいかを提案する。

※「ゆるやかなネットワーク」とは・・・持続可能な地域と共に学ぶ体制。学校として、「担当が変わってもつながることができる」「時間をおいてもつながることができる」「学校を温かく見守ってくれる存在がいる」状態。

2 研究の内容

地域とつながるワーキンググループ（以下：地域とつながるWG）では、昨年度までの研究で提案された内容を踏まえ「生涯学習力」を高めるための要素として地域と共に学ぶ体制づくりが必要であると考え、今年度の研究を進めてきた（図1）。継続してよりよく関わり続けていくにはどうしたらよいかを探るため、現在学校と関わりをもっている人、団体を対象に、意識調査と意見交換会を行った。

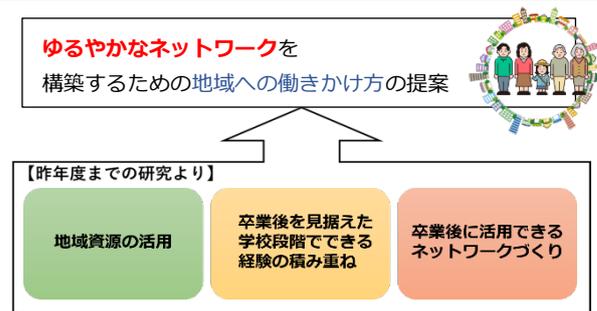


図1 昨年度の研究から

(1) 意識調査「地域との関わりについてのアンケート」（12か所）

現在、授業で関わっている12か所の団体や個人の方を対象にアンケートを実施し、本校と関わりを継続できている背景や要因を探った（図2、3）。

（2021年7月実施）対象の方々は

1、2年関わっている方々が約半数と多いが、中には7、8年関わっているところもあり、大学竿燈会については35年と長い関わりがある。アンケートの結果から、本校と継続して関わっている理由として、「協力可能な内容だった」「本校から依頼があった」

「継続可能な回数、日程だった」「本校の児童生徒、職員の印象がよかった」といった結果が得られた。また、問7「関わる前と後で本校の印象に変化はありましたか」の回答からは、関わる前後で本校の印象に変化があったという回答が多く得られた。特に「児童生徒、職員に対する印象」「障害のある児童生徒との接し方」「『附属』という学校に対する印象」という3点について、多くの回答が得られた（図4）。

小学部	中学部
<ul style="list-style-type: none"> ○生涯学習奨励員協議会（絵本の読み聞かせ、紙芝居など） ○M'sスポーツクラブ（体操教室） ○ペガボール推進員（ペガボール） ○生け花サークル（生け花教室） 	<ul style="list-style-type: none"> ○ウェルビューいずみこども園（園児との交流） ○踊りの教室「洋の会」（音楽における踊りの指導）
高等部	全校
<ul style="list-style-type: none"> ○08COFFEE（作業学習の技術指導、業務の一部受託） ○不銜窯（作業学習の技術指導） ○イルスタジオ（ストリートダンス） ○通町商店街（清掃活動） 	<ul style="list-style-type: none"> ○秋田大学竿燈会（演技・囃子指導、交流会サポート） ○秋田生鮮市場（買物、製品の展示）

図2 アンケート依頼先

【設問例】

関わりの中でよい点と難しい点は？

本校を知ったきっかけは？

関わる前後の本校の印象は？

関わりを継続している理由は？



図3 アンケート設問例

【問7】

関わる前と後で、本校の印象に変化はありましたか

【回答例】

児童生徒、職員に対する印象

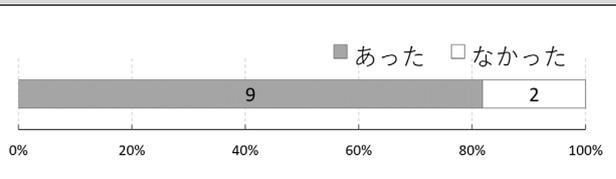
児童生徒、職員が非常に明るい雰囲気で行っている。児童生徒との関わり方から職員の深い愛情を感じた。

障害のある児童生徒との接し方

障害のある子どもに対しても、当たり前な接し方でよいのだと思った。

「附属」という学校に対する印象

「附属」の学校は地域と関わるイメージがなかったが、地域に貢献したい、地域との関わりを大事にしたいという気持ちが強いと感じた。



※無回答 1

図4 関わる前後での本校の印象の変化

(2) 夏のセミナーの意見交換会とWGでの話し合いから

各分野の方々に参加いただき、地域と継続して関わっていくためのキーワードとなるものは何か、意見交換を行った。地域との連携の方法として、コミュニティスクールや地域と関わっている学習の事例について情報を共有した。地域と継続して関わるためのキーワードとして「共通の課題をもつ」「協働」といった地域との対話の重要性を共有することができた(図5)。夏のセミナー後のWGでの話し合いで、コミュニティスクールの実践例や「共通の課題をもつ」といったキーワードから、本校でも地域の人を集めて、本校との関わりについて、情報共有や意見交換会を開催することとした。



図5 夏のセミナーから

(3) 学校と地域の関わりについての意見交換会

アンケートに協力いただいた方々を対象に、「学校と地域の関わりについての意見交換会」を実施した(2021年12月実施)。授業への協力以外で地域の方をお招きし、一堂に会するのは本校として初めての試みであった。当日は9名の方に参加いただいた。内容はとしては、校内の授業の様子を参観していただくことと、参加者との意見交換会の2本立てで行った。

①校内参観

校内参観では、地域の方々がふだん関わっている学部以外の児童生徒の授業の様子も参観していただく機会として設定した。参加した方々は学部によっての実態の違いに驚いたり、作業学習など児童生徒が集中して取り組んでいる様子に感心したりしながら参観していた(写真1)。



写真1 校内参観の様子

②学校と地域の関わりについての意見交換会

ア参加者同士の情報共有の場として

意見交換会の中では、参加した方々から、自己紹介とともに現在取り組んでいることや本校と関わっている中で感じたことを話していただき、情報共有を行った。

以下、意見交換会から抜粋(図6)

- ・教職員との連携があるおかげで交流の内容がよりよくなっている。
- ・児童生徒との接し方で悩むときがある。
- ・交流を重ねたことで指導する側としてスキルアップした。
- ・授業参観で児童生徒の新たな姿が見られた。
- ・お互いにとってメリットのある活動になっている。
- ・地域で子どもを見守っていきたい。
- ・関わりをもったことで、附属という学校への敷居が下がった。

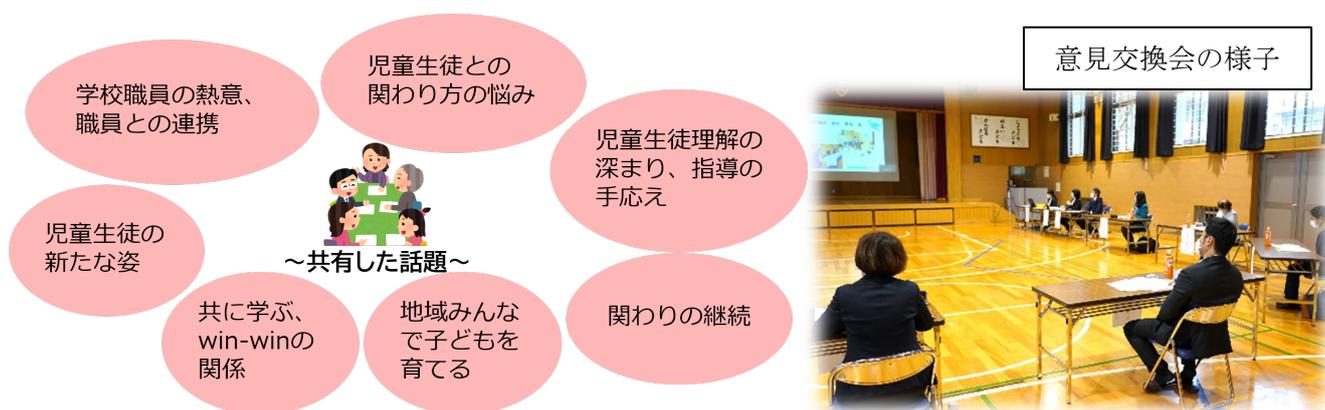


図6 意見交換会の様子から

イ意見交換会を経た参加者の感想

意見交換会の実施後、参加者に向けて感想アンケートを実施した。アンケートの回答から、学校側だけではなく、地域の方々も今回の会を有意義に感じてくださっていることが分かった。意見交換会の継続を望む声も多く聞かれた。

以下、意見交換会後のアンケートから抜粋(図7)

- ・ 今後はもっと生徒を巻き込んで授業をしてみようと思った。
- ・ 他業種の方の話を聞いてよかった。これからの取組に反映したい。
- ・ 地域の関係機関同士がつながる機会になった。
- ・ 他団体の子どもとの接し方等、参考になった。今後も意見交換会を継続してほしい。

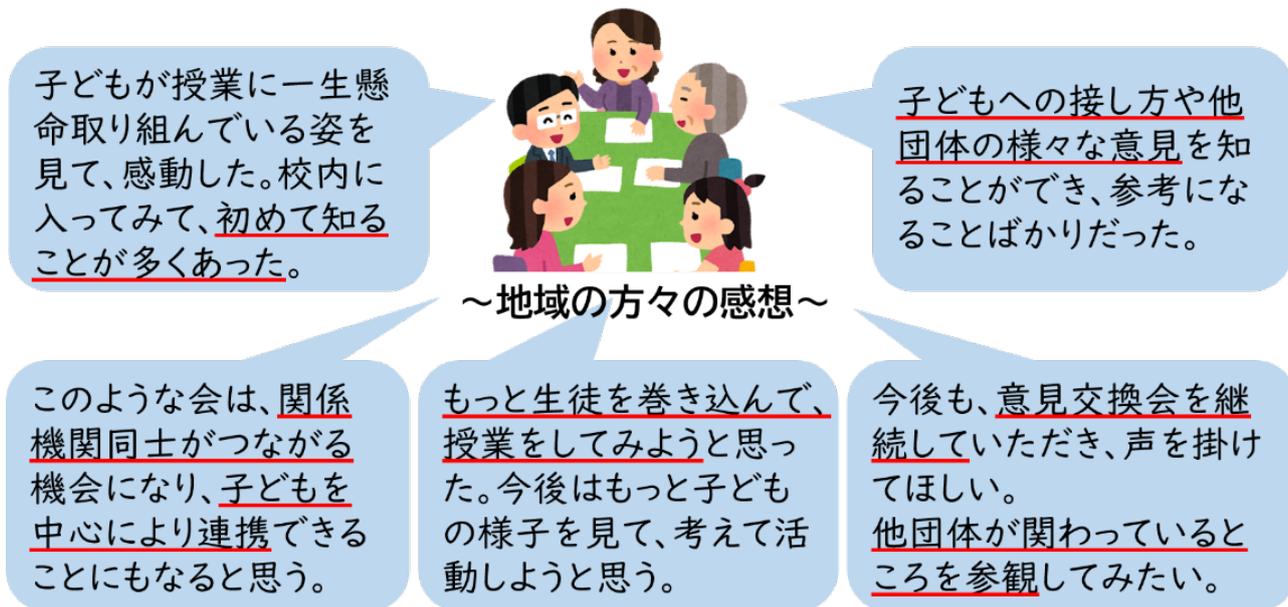


図7 意見交換会実施後のアンケートから

ウ意見交換会を経た学校職員の意見

参加した学校職員は、今回の意見交換会を経て、地域の方の声を直接聞くことができたという点や地域の方同士で情報共有をする場になった点など非常に有意義な会であり、今後も継続したいという意見でまとまっている。地域の方々に日頃から温かく見守っていただいていること、本校の児童生徒が地域の役に立っていくことなど、お互いにとってメリットのある活動を設定していくことが、関わりを継続していくために大切であると考えた（図8）。

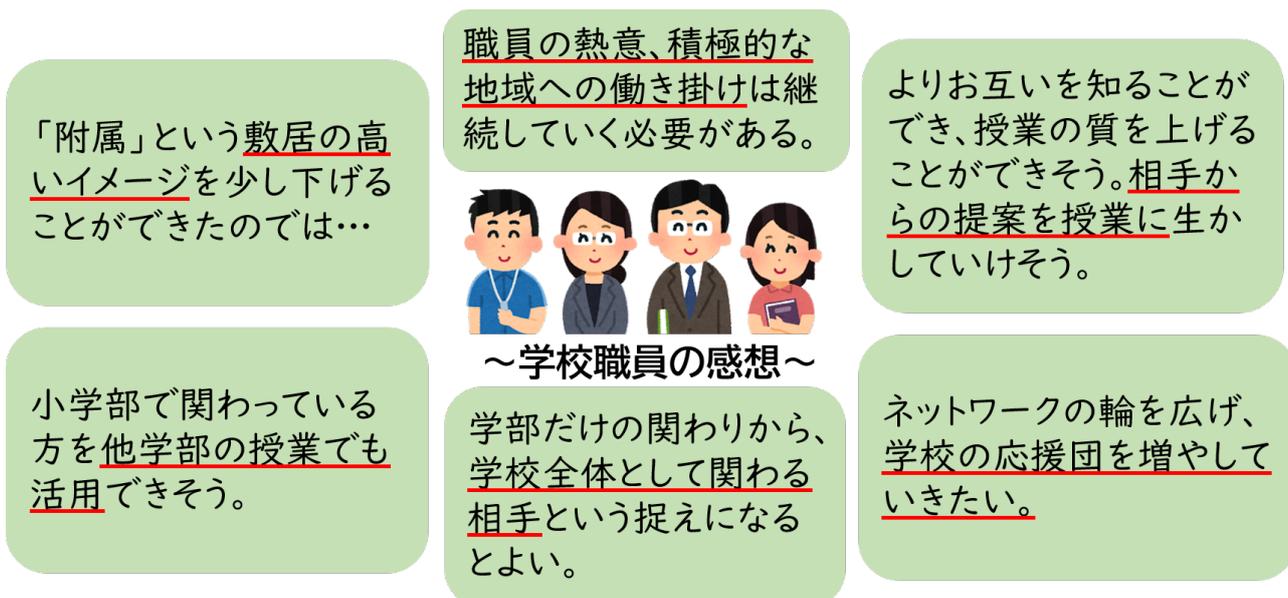


図8 本校職員の感想

エ意見交換会の成果

意見交換会を通して、小学部でお世話になっている生け花の地域の先生を高等部でも活用する機会につながった。高等部段階では、生け花の体験だけではなく理論も学んだり、地域のコミュニティセンターを利用したりするなど、より広く深く学ぶことができた。この経験を自分の居住地でも生かせるようにつなげていきたい。高等部との関わりした後、生け花の先生にインタビューを行ったところ、「小学部と高等部では実態が違い、実態に合わせて内容や指導方法も変化させなくてはいけないため難しいと感じる」「高等部の生徒には生け花の理論も教えることができ、体験の中で理論を生かそうとしている姿も見られてうれしかった」といった話をしていただいた。また、校内参観の際に高等部陶芸班の様子を見たことから、「地域のコミュニティセンターに飾る花を、陶芸班の作った花器に飾れないか」「もっとコミュニティセンターも活用してほしい」といった提案もいただいた（図9）。生け花の活動後には、生け花の先生から紹介していただいた茶道の先生から、高等部の生徒が茶道を習うという機会もできた。一つの学部だけが関わるだけでなく複数の学部で同じ方と関わったり地域の方に複数の学部の取組を見ただく機会を設けたりすることで、関わりに広がりや深まりが生まれたり新たな取組みにつながっていったりすることは一つの成果と言える。

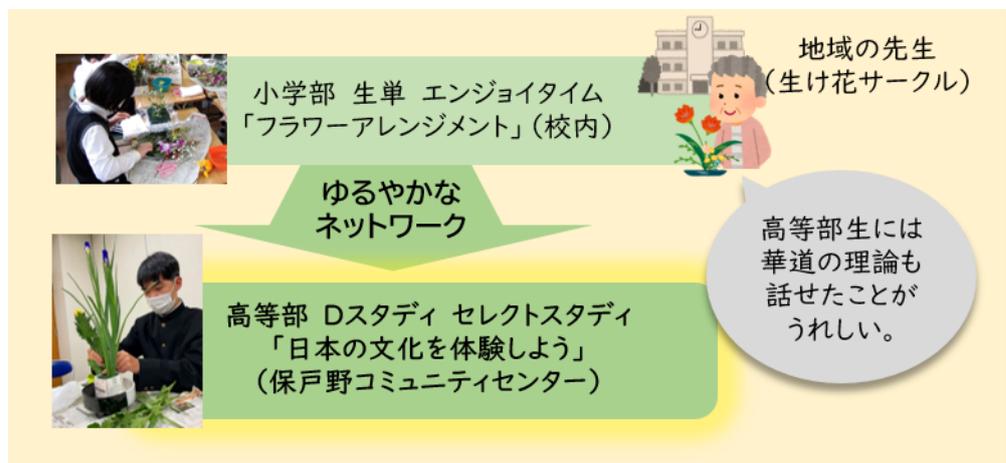


図10 地域の先生とのつながり

3 今後に向けて

意識調査、夏のセミナー、意見交換会の実施や地域とつながるWGで話し合いをした内容を受けて、来年度に向けて2点のことを提案したいと考える。1点目は、今回成果のあった意見交換会を今後も継続し、さらに内容を充実させていくための校内体制の整備について、2点目は来年度以降もゆるやかなネットワークを生かして生涯学習力を高めていくための授業づくりにおける工夫についてである。

(1) 「学校と地域の関わりについての意見交換会」の継続と会の充実、校内体制の整備

先にも述べたとおり、学校と地域の関わりについての意見交換会に参加した地域の方々からは、「来年以降も続けてほしい」という声が多く聞かれた。そこで、地域の方により学校を知っていただけるように、会の充実も図っていきたいと考える。

①意見交換会の充実に向けて

意見交換会の充実に向けて、3点の提案を考えた（図10）。1点目は生徒の部分的な参加である。学校の紹介であったり、またはおもてなしであったりといった部分で、本校の学習で取り組んでいることを生かして生徒たちが関わることで、参加していただいた地域の方々により学校のことを知っていただくことができると考える。2点目はより幅広い立場の地域の方々に参加いただくことである。今回は、現在授業で関わっていただいている方々に限定して開催したが、今後は進路先や現場実習先



図10 意見交換会の充実に向けて

の方々にも参加していただくことで、意見交換会での情報共有などがさらに広がりや深まりをもっていくと考える。3点目は参加者同士が関わる場を設けることである。今回、参加いただいた方々からも「他の団体の接し方が参考になった」「同じ地域の人と交流する場になってよかった」といった声が聞かれた。そういったニーズに応えることで、本校にとってだけではなく、参加していただいた方々にとっても、よりメリットのある会となり、会の継続、発展につながると考える。

②校内体制の整備について

来年度は地域とつながるWGは発展的解消となる。そのため、来年度も学校と地域の関わりについての意見交換会を行うために校内の体制を整えておくことが必要だと考える。今回、意見交換会を開催した際、意見交換会での情報がその後の授業に生きる場面があった。今後は、各学部の主事が参加し、意見交換会で得た情報を学部を持ち帰ることで授業に生かせる場面がさらに増えると考え。そのため、この意見交換会の運営を教務部の分掌業務の一つとして位置付けることを提案する（図11）。メンバー構成については検討していく。

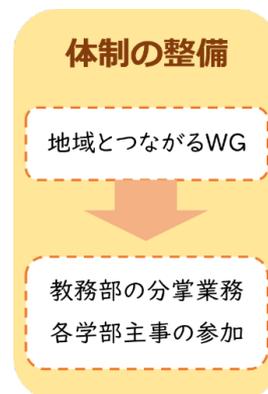


図11 校内体制の整備

（2）ゆるやかなネットワークを生かして生涯学習力を高めるための授業づくりにおける工夫

①全校職員での情報の共有

意見交換会で得た情報は授業づくりにおいて非常に有益なものが多かった。そのため、来年度は早い段階で意見交換会を行い、その情報をすぐに全校職員に共有することで、年間指導計画を立てる際に地域の人材の活用を検討しやすくなり、より授業で生涯学習力を高めるために充実した学習ができるようになっていくと考える（図12）。



図12 全校への情報共有

②地域の声を聞く取組み

今回の意見交換会を通じて、地域の方の思いを直接聞くことの大切さを改めて感じた。そのため、意見交換会という学校全体の場だけではなく、一つ一つの授業でも地域の方々の生の声を聞きながら関わっていくことで、さらにゆるやかなネットワークが構築されていくと考える。具体的には授業で地域の方と関わる際、事前打合せが主となっていたが、関わっていただいた後に感想や難しかったことなどをアンケートやインタビューでお聞きする。そうすることで、より授業の目的に迫るための関わり方を検討していくことができると考える（図13）。



図13 地域の声を聞く工夫

（3）地域とよりよく関わるために

昨年度までの取組と今年度の取組を踏まえ、来年度以降も児童・生徒の生涯学習力を高めていくためには、地域にゆるやかなネットワークを築き、地域全体で子どもの成長を見守っていくこと、そして、その地域を生かして児童生徒が自分の居住地域でも力を発揮できるようにしていくことが大切である。そのために、より効果的な地域との関わり方を学校側、地域側の双方の視点を取り入れながら、双方にメリットのある形で探っていきたい。